

# 児童作文に見る程度修飾表現の発達

宮城 信

## A Development of Degree Expression on Written Compositions by Elementary School Students

Shin MIYAGI

### Abstract

In this paper, We will aim to elucidate the development prossece in writing ability of children to use Degree Adverb using . This issue is important to elucidate the writing ability. However, recent several studies about these issue is not enough. Therefor, we will solve these problems with new method that analyze verification of the case.

**キーワード**：児童作文，語彙使用調査，程度表現，作文能力の発達

**keywords**：written compositions by elementary school students, investigation of words usage, degree expressions, development of writing ability

### 1. はじめに

児童の書いた作文（以下、「児童作文」とする）における表現力はどのように発達していくのであろうか。国立国語研究所（1989）の児童作文の調査では、主に自立語に関して語彙の種類や使用頻度などを調査・分析し、その使用状況が学齢の進行に沿って発達していく様子が捉えられている<sup>\*1</sup>。大規模な作文調査は、人手での資料の収集と集計・解析が最大の障害となり、個人レベルでの研究は難しく、これまでは研究機関レベルでの研究に頼らざるを得なかった。その結果、国立国語研究所（1989）以降、しばらく後続するまとまった調査はなされていない。近年、電子計算機の発達によって、個人レベルでも比較的簡単に集計・解析が行えるようになった。その恩恵を受け、ここ数年の先行研究によって、児童作文の分析が進められ、その実態が少しずつ明らかにされてきている<sup>\*2</sup>。本研究は、これらの先行研究に連なるものであるが、より十分に整備された条件で作成された作文資料に基づき考察が進められている。一方、もう一つの障害である児童が書いた作文を資料として収集する困難さに関しては、昨今の個人情報保護意識の高まりにより、webなどで公開されているものも含め、さらに程度を増してきている。結果的に研究自体が限定的になり、児童作文、およびその作成能力に関する研究はいまだ黎明期にあると言ってよい。現在の児童（以下、「学習者」とする）の客観的な文章作成能力（以下、「作文能

力」とする）はほぼ不明であり、現状では、まず量的に分析できる語の使用や文構造に注目した分析から進める必要がある。

まず、本研究で捉えようとする学習者の作文能力に関して述べておく。一般的に作文能力と捉えられる力には、次の二つの能力が含まれている。

- (1) ①語彙・用法の獲得（新しい言葉を覚える。）
- ②用法の使い分けの獲得（既習の語を状況に合わせて使い分ける。）

仮に、資料の中からある表現が採集されたとして、それは①、または②のいずれの作文能力に関わるものであるのかが問題となる。確かに書かれた作文だけからの調査では、この二つの能力の発達段階の違いを明確に区別して捉えることは難しい。本稿の立場としては、①が先行して定着する能力であること、後に見るように学齢の進行に沿って使用例が増加していくことから、調査結果が主に①の発達段階を反映したものであると考えておく<sup>\*3</sup>。したがって、以降の本稿で言う作文能力の発達とはこの意味で用いることとする。語の獲得から、使用までに移行期間がある可能性もあるので、念のため調査結果を一応の「定着」の時期と捉えることにする。

### 2. 児童作文コーパスの必要性

すでに指摘したように、近年の児童・生徒の作文を調査資料とした先行研究では、資料収集に大きな制約があること、また、作文が書かれる条件や環境

が質的に不統一であることに問題があったと言ってよい。量的な問題は別としても、収集される作文のほとんどが、集められるものを幅広く収集したため、作成時間や文種、題などの点で等質性を欠いていた。教師や保護者などの大人の手が入った作文（文集やwebからの調査）であったりと学習者の作文能力の実態から外れたものである可能性が高い。基本的に教室外に持ち出され、公開される作文は多かれ少なかれ教師の手が入った作品となっていると見てよい。そこで本研究では、学習者の作文能力の推定に耐え得る資料とするために、可能な限り、教師等からの外的影響の少ない、かつ題（テーマ）に等質性があり、そして環境的にほぼ同一の条件で作成された作文を収集して作成された、「児童・生徒の作文コーパス」（宮城・今田2015）の整備から始めることにした。

### 3. 調査

#### 3.1 調査概要

本研究では、調査資料を収集するために本学部附属小学校を含む協力校（2校）に依頼して、全児童を対象とした悉皆調査を実施した\*4。調査の概要は以下の通り。

(2) 調査対象：国立大学附属小学校6学年（小学1年生-6年生）、2校

調査時期：2014年7月

調査条件：作文の題は「ゆめ（夢）」、作文作成時間は説明も含めて40分\*5、調査ではB4の専用調査用紙を使用した\*6。

なお、本調査では、題のみを提示し、教員は一切の事前指導を行っていない。

#### 3.2 調査資料

本研究においては、調査の基礎資料である作文コーパスの整備も重要な課題である。収集した作文は以下の要領で電子化（プレーンテキストコーパス化）が進められた\*7。

(3) [電子化の指針]

- できるだけ、正確に調査用紙紙面を再現するよう心がける。
- 段落初めの一字下げや空欄（意味不明なものも含めて）も正確に記録する。
- 誤字・脱字、文字種の違いにも注意して、正確に記録する。

- 入力後に入力者以外の者が原本と照合し、入力ミスを修正する。
- 個人情報に関わる部分（個人が特定される可能性のある語句や学校名、氏名・渾名など）は、当該部分を“\*”で置き換える。
- 1作文1ファイルで記録し、整理番号を付し、整理番号から、課題・児童の学年・クラス・性別だけを判別できるようにする。

以上の指針によって電子化された本調査の調査資料の規模は以下ようになった。

(4) [資料の詳細]

総作文数：912編（1年生172編，2年生133編，3年生136編，4年生194編，5年生136編，6年生141編）

形態素数：236,769短単位\*8（1年生：16,310(94.8)，2年生：21,050(158.3)，3年生：44,424(326.7)，4年生：53,096(273.7)，5年生：47,059(346.0)，6年生：54,830(388.9)

※単位省略，括弧内は1作文あたりの平均形態素数。

以上が「児童作文コーパス」「児童・生徒作文コーパス」の一部の概要である。作文の字数は、予想通り学齢の進行に沿って、ほぼ順調に増加していることが確認できる。特に2年生から3年生へかけての字数の増加（158.3短単位→326.7短単位）が顕著である。

### 4. 調査方法

#### 4.1 調査の目的

本調査の目的は、単純に児童作文における程度副詞語彙の使用頻度を調査することだけではない。どの学齢でどのような品詞を修飾する用法が使用されているのかに着目して、それを作文能力の発達の反映と見て、その過程を推定していくことにある。例えば、すでに多くの指摘がなされているように、児童作文において「～(する)が、～」 「しかし、～」などの逆接(の接続表現)が小学校中学年以降で使用が増加する傾向が見られることと同様に、本稿では程度修飾表現に関しても学習者が段階的に使用を増加させ、並行して用法の多様性も定着させていくと考えている。

関連して、宮城（2015）では、同資料の児童作文で「楽しい」や「うれしい」などの肯定的感情表

現の多様化に程度副詞の使用が関係していることが述べられている。すなわち、ある段階で程度副詞語彙を獲得した学習者には、新規の感情表現語彙を獲得することと並行して、既習の語を程度副詞で修飾することによって、無標の語と区別して新たな表現を創り出すという方略が見られるようになるという分析である。よって、本稿では、程度副詞語彙の年齢別出現状況と用法の使用状況の分析という二つの観点から、学習者の程度副詞語彙の使用の発達を明らかにすることを試みる。

#### 4.2 程度副詞の分類と用法

程度副詞の文法上の働きは、属性(質)・動きを表す成分にかかってその尺度上の大きさを限定するというものである。例えば「大きなリンゴ」に対して程度副詞が修飾した「とても大きなリンゴ」が指し示す対象は、様々な大きなリンゴの中から取り立てて大きい方に位置づけられるリンゴに限定される。また、程度副詞は、文中の様々な成分と修飾関係を構成することができる。主な修飾関係は以下の通り。

##### (5) [程度副詞の修飾関係]

- ・ 純粹程度の修飾関係  
 ㉠ とても面白い。
- ・ 量的な程度修飾関係  
 ㉡ すこし飲んだ。
- ・ 比較の程度修飾関係\*9  
 ㉢ 桃よりずっと甘い。
- ・ 否定文脈の程度修飾関係  
 ㉣ あまり高くない。

それぞれの修飾関係を構成することができる代表的な語を次にまとめた。本調査では、これらの語に関して、作文コーパスで使用されているすべての用例を収集した。なお、各語の後の括弧内で示した数値は、本調査で収集された用例数を示している。無標のものは採集されなかった語である。

##### (6) [純粹程度の程度副詞]

とても(365例)、非常に、たいへん(1例)、たいそう、極めて、すごく(125例)\*10\*11 もっとも(4例)

[比較の修飾関係の構文文の程度副詞]

ずっと(54例)、もっと(149例)、いっそう、より

[量程度の程度副詞\*12]

よほど(1例)、だいぶ(1例)、かなり\*13(1例)、

相当(1例)、結構(5例)、すこし(115例)、ちょっと(48例)、ちょっぴり、やや

[否定文脈で使われる程度副詞\*14]

たいして、あまり(76例)、そんなに(17例)、ちっとも(1例)、すこしも(1例)、全然(17例)、まったく(16例)

50語程度を目安として一定数の用例が採集された下線の以下の7語を考察の対象とした\*15。

(7) とても、すごく、ずっと、もっと、すこし、ちょっと、あまり

程度副詞は、動詞や形容詞、名詞など様々な品詞を修飾することができる。本調査では、年齢に応じてどのように修飾される品詞の幅が拡大していくのかにも注目した。本調査の修飾される品詞の分類(修飾用法)は以下の通り\*16。

##### (8) [修飾される品詞と修飾用法]

動作動詞 (㉠ かなり 歩く。)

状態・存在動詞 (㉡ ずっと 待つ。)

心理動詞\*17 (㉢ ちょっと 悩む。)

感情・感覚形容詞類\*18 (㉣ すごく 怖い。)

属性形容詞類 (㉤ あまり 重くない。)

名詞 (㉥ すこし 前。)

### 5. 調査結果と考察

#### 5.1 使用状況①(程度副詞全体)

前節の(7)の語群を対象とし、年齢別の出現数に注目して児童作文コーパスで調査を行った。

[表1] 年齢別使用状況

	すごく	とても	もっと	ずっと	すこし	ちょっと	あまり	合計
小1	18	6	14	3	0	5	3	49
小2	12	15	13	4	3	5	4	56
小3	14	55	30	8	15	9	9	140
小4	26	76	32	20	21	12	17	204
小5	30	117	23	7	28	11	14	230
小6	25	96	37	12	48	6	29	253
合計	125	365	149	54	115	48	76	932

[表1]の結果を基に、学年別に1万語あたりの使用頻度を集計した。

[表2] 年齢別使用頻度

	すごく	とても	もっと	ずっと	すこし	ちょっと	あまり	平均
小1	11.04	3.68	8.58	1.84	0.00	3.07	1.84	4.29
小2	5.70	7.13	6.18	1.90	1.43	2.38	1.90	3.80
小3	3.15	12.38	6.75	1.80	3.38	2.03	2.03	4.50
小4	4.90	14.31	6.03	3.77	3.96	2.26	3.20	5.49
小5	6.37	24.86	4.89	1.49	5.95	2.34	2.97	6.98
小6	4.56	17.51	6.75	2.19	8.75	1.09	5.29	6.59
平均	5.95	13.31	6.53	2.16	3.91	2.19	2.87	

(※1万語あたり)

[表2]の結果から、程度副詞の使用に関する全体的な傾向として、学齢の進行に沿って用例数が増加していく様子を窺うことができる(平均:4.29~6.59)。本節での考察をまとめる。

(9)「ずっと」や「もっと」のように低学年から用例が見られ、学齢による顕著な変化が見られない語がある。

(10)「すごく」や「ちょっと」のように学齢が進むにつれてむしろ使用頻度が減少する傾向が見られる語がある。

(11)類似したペアの副詞である「すごく」と「とても」、「ちょっと」と「すこし」の使用頻度は、負の相関関係にあり、学習者の語の使用基準が話し言葉的表現から書き言葉的表現に次第に移行(修正)されていく様子を窺うことができる。

(12)話し言葉的表現から書き言葉的表現への移行は順次進んでいくが、最終学年になっても完全には移行せず、一部話し言葉的表現が見られる。

考察を進めるにあたって、程度修飾表現の用例の増加が、被修飾成分の使用頻度の増加に連動するものではないかという懸念を払拭しておかなければならない。児童作文コーパスの中で被修飾語としての出現頻度上位の3語(「楽しい」「うれしい」「面白い」)に関して、1万語あたりの使用頻度を調査した。(表中の「小1」は「1年生」に対応している。以下同様。)

[表3] 頻出被修飾語の使用頻度

	楽しい	うれしい	面白い	平均
小1	28.20	8.58	8.58	15.12
小2	12.83	5.70	0.95	6.49
小3	13.06	7.65	2.48	7.73
小4	13.56	5.46	6.59	8.54
小5	7.44	8.92	6.16	7.51
小6	8.57	4.01	5.47	6.02
平均	13.94	6.72	5.04	

(※1万語あたり)

[表3]から分かるように、これら3語は低学年からの頻出語で、使用頻度にばらつきがあり、段階的に使用頻度が増加するという傾向は見い出せなかった(「楽しい」に関しては、逆に使用頻度が減少していくように見える)。よって、[表2]の偏りは、程度修飾表現の発達を反映したものと見てよいと考えられる。以下、その立場に立って、考察を進めていくことにする。次節からは、調査対象の7語の中で、使用頻度の変化に特徴が見られた3語を取り上げ、語別に調査結果を詳細に検討していく。

## 5.2 使用状況②(とても)

「とても」の用法別使用頻度を基に学年別に1万語あたりの使用頻度を集計した。

[表4]「とても」の用法別使用頻度

	動作	存在・状態	心理	感情・感覚	属性	名詞	平均	合計
小1	0.00	0.00	0.00	1.84	1.84	0.00	0.61	3.68
小2	0.00	0.00	0.95	2.85	3.33	0.00	1.19	7.13
小3	0.00	0.23	1.58	5.18	5.18	0.23	2.06	12.38
小4	0.38	0.19	0.94	6.59	6.22	0.00	2.39	14.31
小5	0.85	1.27	2.34	8.29	12.11	0.00	4.14	24.86
小6	0.36	0.73	1.82	5.29	9.30	0.00	2.92	17.51
平均	0.27	0.40	1.27	5.01	6.33	0.04		

(※1万語あたり)

「とても」の使用状況に関しては、感情・感覚と属性形容詞類への用例への顕著な偏りが見られる(形容詞類を修飾しやすいというのは典型的な程度副詞に共通して見られる特性の一つである)。本節での考察をまとめる。

(13)感情・感覚、属性形容詞類を修飾する用法が学齢の進行に沿って増加していく。

(14)動作動詞や存在動詞を修飾する用法は他の用法に比べて中学年頃からと比較的遅れて増加していく。

## 5.3 使用状況④(ずっと)

「ずっと」の用法別使用頻度を基に学年別に1万語あたりの使用頻度を集計した。

[表5]「ずっと」の用法別使用頻度

	動作	存在・状態	心理	感情・感覚	属性	名詞	平均	合計
小1	1.23	0.00	0.61	0.00	0.00	0.00	0.31	1.84
小2	0.95	0.00	0.95	0.00	0.00	0.00	0.32	1.90
小3	0.45	0.45	0.68	0.00	0.00	0.23	0.30	1.80
小4	1.70	0.57	0.57	0.38	0.38	0.19	0.63	3.77
小5	0.64	0.42	0.42	0.00	0.00	0.00	0.25	1.49
小6	0.91	0.00	0.91	0.18	0.00	0.18	0.36	2.19
平均	0.98	0.24	0.69	0.09	0.06	0.10		

(※1万語あたり)

「ずっと」の用法別の使用状況に関しては、動作、存在・状態、心理動詞が主で、他の品詞を修飾する用法はあまり見られない。「ずっと」は「声をかけられるまで、ずっと探していました」のような事態の持続を表す修飾関係が低学年の段階から見られるが(動作、存在・状態、心理の修飾用法の多くがこれにあたる)、比較の程度修飾関係での「ずっと」の用法((5)を参照のこと)は積極的には使用されていない。その原因として、同じ修飾関係を構成す



る語である「もっと」の用例が低学年から見られる（[表2]を参照のこと）ことが遠因となっている可能性がある。「ずっと」の用法を構文の種類という観点から見ていくと、典型的な比較の修飾関係の構文の型である「～は～より(も) ずっと～(だ)」が期待されるが、比較の修飾関係では4年生で「サッカーを いまよりも ずっと 好きになって～」（感情・感覚）や「ぼくが 小さいころよりも ずっと うまくなったと思います。」（属性）のような用例がわずかに見つかる程度で、その後の用例には目立った増加が見られない。もっとも比較的用例の多い「もっと」の用法においても、同様に「～より(も) もっと～(だ)」型の用例は、149例中わずか12例(8.1%)に留まる。この段階の学習者にとって、比較対象は文脈に依存したものであり、構文としての比較の修飾関係への意識は薄いのかもしれない。本節での考察をまとめる。

(15)「ずっと」は動作、心理動詞の用法が先行し、やや遅れて存在・状態動詞の用法が見られるようになる。

(16) 児童作文では、「ずっと」や「もっと」と比較対象の「～より」が共起した比較の程度修飾関係の用例はあまり見られない。

試みに、同作文コーパスで「～より」形式の比較の修飾関係の用例を検索してみると、1年生(5例)、2年生(13例)、3年生(22例)、4年生(19例)、5年生(25例)、6年生(28例)と、順調に増加する傾向にあり、表現の型としてはけっして特殊なものではないことが分かる。このことから、程度修飾表現の中でも、比較の程度修飾関係への生起は定着が遅れる傾向があると考えられる。

#### 5.4 使用状況⑤(あまり)

「あまり」の用法別使用頻度を基に学年別に1万語あたりの使用頻度を集計した。

[表6]「あまり」の品詞別修飾状況

	動作	存在・状態	心理	感情・感覚	属性	名詞	平均	合計
小1	1.23	0.00	0.00	0.61	0.00	0.00	0.31	1.84
小2	0.00	0.95	0.00	0.00	0.95	0.00	0.32	1.90
小3	0.68	0.45	0.23	0.23	0.45	0.00	0.34	2.03
小4	0.57	0.19	0.57	0.38	1.51	0.00	0.53	3.20
小5	1.27	0.64	0.21	0.42	0.42	0.00	0.50	2.97
小6	2.01	1.09	0.55	0.18	1.46	0.00	0.88	5.29
平均	0.96	0.55	0.26	0.30	0.80	0.00		

(※1万語あたり)

「あまり」の使用状況に関しては、比較的动作を修飾する用法が多い。「あまり」が純粹程度(状態修飾)的ではなく量程度的な対象の低評価を表す語でもあることを窺わせる。「あまり」の用法全体で見れば、中学年頃から用法が少しずつ増加しているように見えるが(0.31~0.88)、用法別に見ると必ずしも順次的な増加は見られず、ばらつきがある。全体の増加傾向を支えているのは、主に動作と属性の修飾用法の増加傾向であり(特に高学年で多く見られる)、その点でも他の語と傾向が異なる。また、5.3節で見た比較の程度修飾の使用が遅れることと同様に、否定文脈と共起する「あまり」の修飾用法の定着が遅れている可能性がある。本節での考察をまとめる。

(17)「あまり」の用法の使用頻度にはばらつきがあり、語別に見ると学齢に進行に沿って増加していくという明示的な傾向は見られない。

(18)「あまり」の修飾用法では、属性以上に動作の用法が使用される傾向がある。一方で、典型的な程度副詞の用法である感情・感覚を修飾することへの偏りが他の用法に比べて少ない。たとえ用例数が次点である「全然」(17例)や「まったく」(16例)を含めたとしても、否定文脈の程度修飾関係の用例の出現は少ない。程度修飾と否定文脈の呼応の制限とを同時に要求する複雑な意味構造の表現であるため、定着が遅れている可能性がある。

#### 6. おわりに

本稿での、ここまでの考察を次のようにまとめる。

(19) 程度副詞の使用は、全体的に学齢の進行に沿って中学年頃から顕著に増加していく傾向がある。

(20) 量程度大の副詞は、量的な程度修飾関係にも純粹程度の修飾関係にもあまり使用されない。

(21) 語ごととの傾向差としては、「とても」のように典型的な程度副詞型の語、比較の「ずっと」や「あまり」のように、比較や否定が程度修飾表現と重なる複雑な表現形式であるため、使用が遅れていくの語がある。

(22) 「ずっと」のように、同じ語内でも用法ごとに使用頻度や定着時期が異なる語がある。

児童作文における程度副詞の使用は、語ごとに発達の様相が異なり、程度修飾表現全体を見渡すと共に、語別の違いにも注目して分析を進めなくてはならない。

本稿の調査によって、語と用法別の使用頻度別の2つの観点から見た学習者の程度修飾表現の実態がいくらか明らかにされた。一方で、本稿で調査した資料の範囲が限定的であることによる出現頻度のゆれに些か不安があり、資料の量的な補充が喫緊の課題である。また、他の文種における同様の調査と対照して、実態の把握をさらに確かなものとする必要がある。また、程度修飾表現を用いた作文能力の完成形(例えば、大学生が書いた同課題の作文での使用実態)との比較も欠かすことができない。いずれも今後の課題としたい。

## 謝辞

本研究は、博報財団第9回児童教育実践についての研究助成「学校現場との協働による児童作文指導の基礎的研究」(2014年度、研究分担者、代表:富士原紀絵)、科研費 基盤研究(B)「作文を支援する語彙・文法的事項に関する研究」(平成26-30年度、研究分担者、代表:矢澤真人)による助成を受けています。

## 追記

本稿の内容は、「児童作文に見る程度修飾表現の発達」(第128回 全国大学国語教育学会兵庫大会、2015年5月31日、於姫路商工会議所)を基に加筆・修正を行った。

## 注

- \*1 国立国語研究所1989では、公開された文集(1970-1979に刊行されたもの)から、児童の作文を広く収集して文種別に使用語彙に関する計量的調査を行っている。
- \*2 近年の児童・生徒の作文を調査した研究に、坂本2010や永田他2010、鈴木他2011などがあるが、条件の等質性や資料の規模において本研究で構築中のコーパスに優位性があると考えられる。本研究のコーパスに関しては、宮城・今田2015を参照のこと。
- \*3 間接的に(1)②の作文能力を図る方法としては、年齢別に用法の使い分けの可否に関するアンケート調査の実施が考えられる。ただし、調査の目標が本稿のようにある文法カテゴリーや語群である場合、設問が多岐に亘りあまり現実的な方法とは言えない。

- \*4 調査に先立って、筆者が協力校に赴いて調査内容の説明を行い、児童の保護者宛に調査の趣旨説明と協力を依頼する文書を配布した。また本調査および収集した資料の利用に関しては、本学の研究倫理審査委員会の承認を得ている。
- \*5 調査時間終了時に、未完成の作文に関しても、氏名だけを確認してそのまま回収した。
- \*6 調査用紙は、すべてB4版で、小学校一年用が240字(15字×16行)小学校二年用が300字(15字×20行)、小学校三年生以上が400字(20字×20行)である。書き足りない場合には、追加の用紙を配布した。
- \*7 併せて専用の検索システムも開発した。詳細は、宮城2015、宮城・今田2015を参照されたい。
- \*8 国立国語研究所が文構造解析の過程で規定した文法単位。同HPによれば、「短単位は、言語の形態的側面に着目して規定した言語単位です。短単位の認定にあたっては、まず現代語において意味を持つ最小の単位(以下、最小単位と呼びます)を規定します。」([http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/morphology.html](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/morphology.html))とされる。短単位の例として、「/豊か/な/暮らし/に/つい/て/」「/大/雨/が/降っ/た/の/で/」のような解析例が掲載されている。
- \*9 比較の修飾関係の構文では、「太郎は 次郎よりずっと背が高い」のように「~より」という参照基準を明示することが基本である。この要素が明示されないと、「??太郎はずっと背が高い」のように文脈の支え無しではどこか欠落感のある文になる。
- \*10 近年若年層の間で「すごい大きい」のように「すごい」の連体形を連用修飾に用いる例が散見される。本研究の作文コーパスにおいては、そのような例はほぼ見られなかったため、考察の対象としない。
- \*11 「すごく」に対する「すっこく」、「よほど」に対する「よっほど」のような異形態や漢字・仮名表記も検索して採集用例数に含めている。
- \*12 仁田2002などは、もっぱら程度性を表す「とても」などの純粹程度の副詞と「かなり」などの量程度の副詞は一部の例で置き換え可能であり、連続的であると指摘している。本調査の範囲で、児童作文の量的修飾表現において「かなり」「相当」などの大きな量程度を表す語の使

用が少ないのは、「たくさん」などの量副詞がよく使われていることに遠因があると考えられる。

- \*13 宮城2012によれば、「かなり」は量的な程度修飾関係の構成も可能であるにも関わらず、実際の用例のほとんどが純粹程度の修飾関係であることが指摘されている。本調査の資料において「とても」に比べて「かなり」の使用がほとんど見られない背景には、先に定着した「とても」で用が足り、学習者があえて「かなり」を使う必要性を感じていないことに起因する可能性がある。
- \*14 否定文脈の修飾関係にも純粹程度と量の区別はあるが、生起の制限においては否定的な文脈であることが優先されるので、本稿では純粹程度と量を区別せずに扱うことにする。
- \*15 用例が少ないことが即、当該の語の未獲得を意味するわけではない。様々な要因（頻出語との衝突、必要性の欠如など）が影響して結果、獲得済みの語があまり使用されないこともある。注13も参照。
- \*16 程度副詞がどのような文の成分を修飾しているのかという調査も検討したが、予備調査でかなりの偏りが見られ、小学生の書いた作文では、一部の名詞にかかる例を除き、ほとんどが連用修飾用法で用いられていたため、対照用の名詞修飾を含め(8)のような分類基準とした。
- \*17 人間の精神活動に関わる動詞群。代表的な心理動詞は、思う、気づく、びっくりする、悲しむなど。
- \*18 本研究の形容詞類には形容動詞も含まれる。

## 参考文献

- 国立国語研究所（1989）『児童の作文使用語彙（国立国語研究所報告98）』東京書籍。（[http://www.ninjal.ac.jp/s\\_data/drep/report\\_nijla/R0098](http://www.ninjal.ac.jp/s_data/drep/report_nijla/R0098). PDFよりダウンロード可能）
- 坂本真樹（2010）「小学生の作文コーパスの収集とその応用の可能性」『自然言語処理』17:5, pp. 75-93, 言語処理学会。（[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jnlp/17/5/17\\_5\\_5\\_75/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jnlp/17/5/17_5_5_75/_pdf)よりダウンロード可能）
- 鈴木一史, 棚橋尚子, 河内昭浩（2011）「作文コーパスからみる生徒の使用語彙」『特定領域「日本

語コーパス」平成22年度公開ワークショップ（研究成果報告会）予稿集』pp.343-350, 国立国語研究所。（[http://www.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/doc/workshop/JC-G-10-02.pdf](http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/doc/workshop/JC-G-10-02.pdf)よりダウンロード可能）

永田亮, 河合綾子, 須田幸次, 掛川淳一, 森広浩一郎(2010)「作文履歴をトレース可能な子供コーパスの構築」『自然言語処理』17:2, pp.51-65, 言語処理学会。（[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jnlp/17/2/17\\_2\\_2\\_51/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jnlp/17/2/17_2_2_51/_pdf)よりダウンロード可能）

仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版。

宮城信（2012）「コーパス調査に基づく程度副詞分類の試み —程度副詞の出現傾向による分類—」『語彙研究』10, pp24-31, 語彙研究会。

宮城信（2015）「児童作文の感情表現」『ことばのこえ』, pp.11-12, 博報堂財団による第9回「児童教育実践についての研究助成事業」出版物。

宮城信・今田水穂（2015）「『児童・生徒作文コーパス』の設計」『第7回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, 国立国語研究所。（[https://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/files/JCLWorkshop\\_no7\\_papers/JCLWorkshop\\_No.7\\_27.pdf#search=%27%E3%80%8E%E5%85%90%E7%AB%A5%E3%83%BB%E7%94%9F%E5%BE%92%E4%BD%9C%E6%96%87%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%83%91%E3%82%B9%E3%80%8F%E3%81%AE%E8%A8%AD%E8%A8%88%27](https://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/files/JCLWorkshop_no7_papers/JCLWorkshop_No.7_27.pdf#search=%27%E3%80%8E%E5%85%90%E7%AB%A5%E3%83%BB%E7%94%9F%E5%BE%92%E4%BD%9C%E6%96%87%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%83%91%E3%82%B9%E3%80%8F%E3%81%AE%E8%A8%AD%E8%A8%88%27)よりダウンロード可能）

(2015年10月19日受付)

(2015年12月9日受理)